

71. 大字単位から見た五箇山の文化的景観の深層構造

—世界遺産相倉・菅沼集落と周辺山村集落の文化的景観の保全に関する研究—

The spatial deep structure of Cultural Landscape in Gokayama based on *oaza*

—The study on Cultural Landscape conservation of mountain villages, Ainokura, Suganuma World Heritage Villages and their surroundings—

森 朋子

Tomoko Mori

This paper aims to clarify the spatial deep structure of Cultural Landscape in Gokayama where world heritage historic villages, traditional houses in the Gassho Style villages in Ainokura and Suganuma, are there from the scope of its units of 44 villages for understanding its Cultural Landscape. The following two points were clarified. 1) We can understand primitive natural condition through *oaza* analysis, which is the unit of villages responding to nature before modern era. This is what showing the main fundamental physical landscape of the region. 2) The main reason of identifying each *oaza* is by its water supply system. It is also the base of its community. So water supply system is the primitive structure of Gokayama region in both of a community and a physical landscape. It seems that to identify the essence of region is the fundamental way for understanding Cultural Landscape as “combined works of nature and of man”¹⁾.

Keywords: *oaza*, mountain village, regional spatial structure, cultural landscape
大字、山村集落、地域空間構造、文化的景観

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

文化的景観は、1992 年以降世界文化遺産の範疇に加えられた概念で、「自然と人間との共同作品」として「人間社会又は人間の居住地が、自然環境による物理的な可能性と制約のなかで、社会的・経済的・文化的な内外の力に継続的に影響されながら、どのような進化をたどってきたかを例証するもの」と定義される¹⁾。1995 年、世界文化遺産に登録された「白川郷・五箇山の合掌造り集落」も、この文化的景観による登録の議論がなされた²⁾が、結果的には合掌造り集落自体を遺産に、その周辺地域は遺産の緩衝地帯として登録された³⁾。後に、我が国でも「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」として文化的景観が文化財の範疇に加えられ、「景観を形成し維持するシステム」⁴⁾の解明と、それを尊重した保全が求められている。

つまり、文化的景観の保全には、景観形成の背景として、人間が居住場所として選択した地において、その自然とどう向き合い生活様式を構築したかという関係性を捉える必要がある。しかし、この点を言及した景観保全に関する研究は、十分進んではいない。

本研究は、この景観形成の背景にある自然と人間の関係性を、五箇山¹⁾の世界遺産と緩衝地帯 22,746.6ha²⁾の空間構造分析を通し、明らかにしようとするものであり、山村集落の文化的景観保全への示唆を得ようとするものである。

1.2 研究の位置づけ

本研究の主題とする農山村地域における「一体となって価値を形成している」文化的景観⁵⁾は、主に伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）の周辺自然環境の景観保全

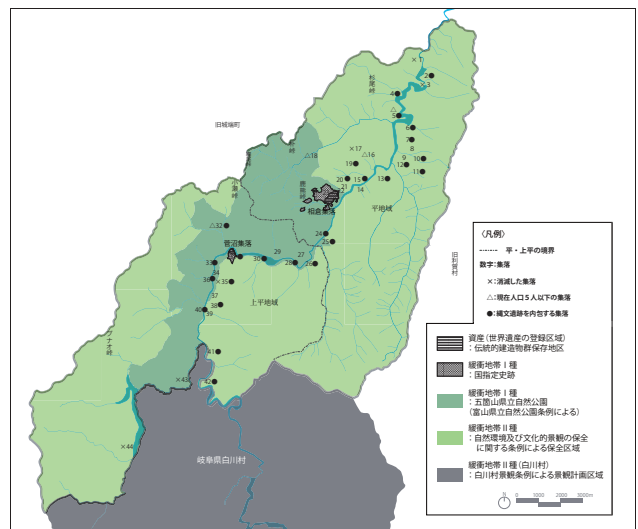


図1: 五箇山の世界遺産と緩衝地帯

に関する研究がなされている。しかし、居住域や棚田等における土地利用^{6) 7)}や水利システム^{8) 9)}などの解明による、伝建地区内や近辺の景観保全が主であり、また、世界遺産の緩衝地帯の保全に関する研究は、都市部で行なわれているが¹⁰⁾、農山村地域での研究¹¹⁾は、ほとんどみられない。

一方で、集落に関する研究は、農村計画学¹²⁾や民俗・地理学¹³⁾など多方面からの蓄積がある。これら集落研究では、集落を「ひとまとまりの包括的な単位として環境が認識され、集落の単位性 (unity) が明らかになる」ものとして、「社会が歴史的に土地の保有・管理を及ぼしていた範囲であり、色濃く日常生活・生産行動の及ぶ領域である集落行政区界」と捉えており¹⁴⁾、本研究では、さらに集落という単位が複数集まったものを地域と捉え、地形・流域等の自然と集落規模の関係から地域空間構造を分析し、景観形成

の背景、すなわち文化的景観の深層構造を、自然と人間の関係性から考察する点で新規性がある。なお、集落地の地形立地については、居住域の物的空間構成要素の関係に着目し、類型化がなされている¹⁵⁾が、本研究は歴史的背景の同じ一地域における視点で異なる。また、大字単位から実証的に地域空間構造を分析する、独自の着眼点を持っている。

1. 3 研究の手法

まず五箇山を集落単位に分解し、その立地特性を、自然環境および社会的特徴を踏まえて明らかにする。自然環境については、飯田ら(2010)¹⁶⁾による集落地特性の分類手法を参考に、地形・流域・縄文遺跡の有無に基づき、集落地の立地環境を類型化した。社会的特徴としては、合掌造り集落地の成立根拠となる近代以前に着眼点を置き、当時の集落地規模を示す指標として、江戸時代の加賀藩政下における村高と、入手できた最古の人口である明治5年の人口を用いた。人口と同様に、集落地面積についても、地租改正で地価を調査した時のデータを用い、分析した。また、大字と流域の関係を把握するために、地図データを重ねて分析した。

次に、集落地単位の根拠について、集落地が密集する2地区に着目して考察した。2012年8月30日から9月30日まで現地に滞在し、現地調査と住民や行政へのヒアリング調査を行なった。

最後に、以上を踏まえ、五箇山の世界遺産集落地と「一体となって価値を形成している」緩衝地帯において、集落地と集落地規模の規定要因、大字単位の規定要因を明らかにすることから、五箇山の文化的景観を形成する背景、すなわち文化的景観の深層構造の一端を明らかにする。

2. 五箇山の大字と集落地

2. 1 集落地の概要

本研究で定義する五箇山は、相倉・菅沼集落地を含む旧上平村(19か村)および旧平村(25か村)の合計44か村であり、世界遺産とその緩衝地帯である。

(1) 社会と生業

中世から、五ヶ山には70の村があった⁽³⁾。永正6年(1509年)の方便法身像裏書に、「越中国利波郡赤尾楮村」とあり、この頃には、既に村の概念が形成されていたことが窺われる。また、天文21年(1552年)の五ヶ山衆連署申定には「下梨」「利賀谷」「小谷」「上梨」「赤尾」別の連署があり、5つの地域的区分けにより「五ヶ山」と呼ばれた。五ヶ山の最初の検地は、元和5年(1619年)に行われた。これ以前までは、村領の境界は明確ではなかったようである。その後、幕末まで村領の改変も村高の増減もなく村々の維持が続けられた¹⁷⁾。文化11年の絵図¹⁸⁾からは、5グループに色分けされた70か村とその繋がりや、いくつかの峠を越えたルートにて、平野部の城端や井波と繋がっている地域的な構造が確認できる。

また、五箇山は寒冷不毛の地とされ、かつて水田は殆どなかった。江戸時代の加賀藩による五ヶ山支配の特色は、

金納制・塩硝上納・流刑地・和紙生産の管理・籠の渡しなどにみられる。藩政期の生業は、寛文10年(1670年)の「城端・井波判方取締文書」にみるとおり、「畠所其上商売第一之所」であり、焼畑・本畑から収穫する農耕が第一で、ついで養蚕や山菜の採取、特産物としての和紙作り・塩硝作りなどの生産売却が主なる稼ぎであった¹⁹⁾。

五箇山44か村は、1889(明治22)年に公布された市制および町村制の施行時に従前の村名を残し、現在も大字として残されており、従来の行政区画と大字は一致する。よって、五箇山の社会空間としての集落地モデルは「標準型」⁽⁴⁾であり、本研究でいう五箇山の「集落地」は、江戸時代の旧村であり現在の大字である。なお、本稿ではこれより、集落地の居住域部分を「集落地」とし、集落地全体、いわゆる村の領域を「大字」と定義する。

(2) 自然環境と歴史的背景

五箇山の約6割の集落地から縄文時代の土器や石器が出土し、五箇山は古来より人の住む環境にあったと考えられている。また、東中江にある東中江遺跡からは、竪穴住居跡が発掘されており、五箇山は定住の地であったことが明らかになっている。一方で、旧平村から平野部を下る庄川は、祖山から下流では山がせまり急峻で、遺跡も見えていない。平野部との交流は、おそらく朴峠や杉尾峠・小瀬峠などの山の尾根道ごとで行なわれたのではないだろうか²⁰⁾と推測されている。

古来の住環境と交流ルートが推測でき、五箇山の集落地は、「庄川および利賀谷沿いに発達した小さな河岸段丘や、山崩れ・地這りに成因をもつ緩傾斜面に立地するのであるが、ここに縄文式遺物の出土と現在の集落地とが重なるということは、五箇山の全歴史的過程を通ずる集落地形成の根源が、こうした自然的な基礎に由来」²¹⁾している。

2. 2 集落地の立地特性

集落地の立地特性について、自然環境面から立地環境を類型化し、大字規模等を示す指標を用い、その特徴を明らかにし、流域圏と大字の関係、谷ごとの特徴と大字の土地利用比率について述べる。

(1) 集落地の立地類型とその特徴

44集落地の立地環境について、地形、流域、縄文遺跡の有無の3つの視点から類型を行なった。

地形は、山地および丘陵地型「M」、砂礫段丘型「G」の2種類⁽⁵⁾に、流域は、庄川「S」、小谷川「O」、梨谷川「N」、境川「A」の4流域⁽⁶⁾に分類できる。五箇山には井戸をもつ住居がほとんどなく、谷川や湧水を生活用水とした。集落地の立地は、水環境の影響を受けていることが予測できる。また、縄文遺跡の有無に着目したのは、集落地の新旧あるいは生活環境として適した立地を意味することによるものである。

集落地の社会的特徴を捉えるために、江戸時代の村高⁽⁷⁾と明治5年の人口⁽⁸⁾による集落地規模を比べた。二つは、概ね平行関係にあり、本稿では、江戸時代変わらず使われた村高の数値を採用し、集落地規模の指標とする。

五箇山地域でもっとも多い類型は「GSJ」で、庄川流域の砂礫段丘に位置し、縄文遺跡を内包する集落である。規模は様々なものを含むが、地域内最大集落もここに含まれ、庄川沿いの平坦な段丘が、この地域の居住に古くから適していたことが推測できる。下梨谷と小谷では、山地および丘陵地にも大小の集落がみられる。

また、縄文遺跡は全地域に及んでおり、庄川沿いの砂礫段丘に多く、山地および丘陵地でも、様々な規模の集落で確認できる。

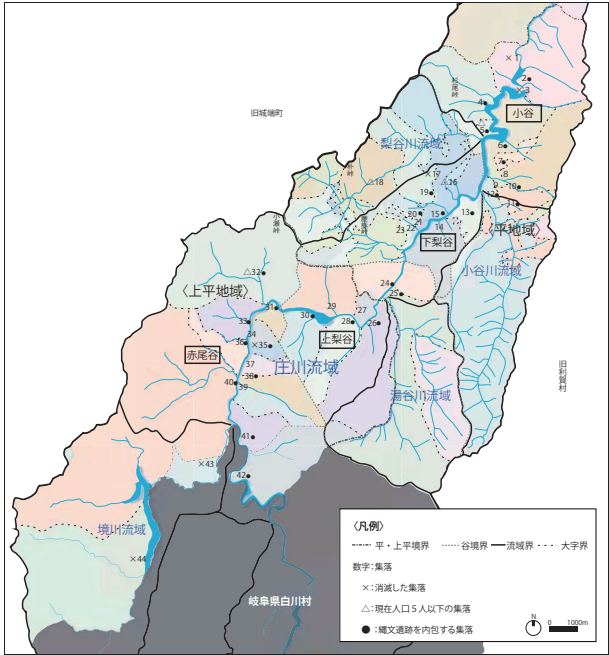


図2: 五箇山の流域界と集落(大字)分布⁽⁹⁾

表1: 五箇山の集落の立地特性

明治22年以降	中世・江戸	利用種	番号	集落名	現在	地形	流域	縄文遺跡(J)	敷型	村高(石)	明治5年人口
旧平村 (25集落)	下梨谷	杉尾	1	下子音	×	M	S	—	MS	15,413	XS
			2	相山	○	G	S	—	GSJ	120,790	L
			3	杉尾	×	M	S	—	MS	5,705	XS
			4	杉尾	○	M	S	—	MSJ	57,658	S
			5	渡原	○	M	S	—	MSJ	23,589	XS
			6	大崩島	○	M	S	—	MSJ	70,733	M
			7	寿川	○	M	S	—	MSJ	65,691	S
			8	入谷	○	M	S	—	MS	104,776	L
			9	東中江	○	G	S	—	GSJ	54,169	S
			10	高草原	○	M	S	—	MSJ	187,703	LL
			11	豆笹	○	M	O	—	MO	22,529	XS
			12	下出	○	G	S	—	GSJ	218,458	LL
	下梨谷	杉尾	13	龍渡	○	G	S	—	GSJ	156,738	LL
			14	大島	○	M	S	—	MS	205,146	LL
			15	下梨	○	G	S	—	GSJ	259,239	LL
			16	上松尾	○	M	S	—	MS	75,543	M
			17	田代	×	M	S	—	MS	20,729	XS
			18	梨谷	△	M	N	—	MN	60,021	S
			19	小東納	○	M	S	—	MSJ	120,696	L
			20	飯橋	○	M	S	—	MSJ	46,229	S
			21	中堀	○	M	S	—	MS	85,399	M
			22	豆笹	○	M	S	—	MS	118,738	L
			23	相倉	○	M	S	—	MS	121,271	L
旧上平村 (19集落)	上梨谷	杉尾	24	上梨	○	M	S	—	MSJ	115,842	L
			25	田向	○	G	S	—	GSJ	120,250	L
			26	皆藤	○	G	S	—	GSJ	146,500	LL
			27	皆谷	○	G	S	—	GS	118,842	LL
			28	小原	○	G	S	—	GSJ	96,671	M
			29	柳島	○	G	S	—	GS	18,526	XS
			30	柳島	○	G	S	—	GSJ	88,085	M
			31	菅沼	○	G	S	—	GSJ	53,951	S
			32	小瀬	○	M	S	—	MSJ	20,188	XS
			33	赤谷	○	G	S	—	GS	96,283	M
			34	田下	○	G	S	—	GS	22,192	S
			35	上中田	×	G	S	—	GSJ	35,742	XS
	赤尾谷	小瀬	36	下島	○	G	S	—	GSJ	53,083	S
			37	西堀	○	G	S	—	GS	56,237	S
			38	東赤尾(上野)	○	G	S	—	GSJ	63,496	S
			39	赤太	○	G	S	—	GS	27,600	XS
			40	西赤尾町	○	G	S	—	GSJ	152,996	LL
			41	猪	○	G	S	—	GSJ	148,842	LL
			42	成出	○	G	S	—	GSJ	31,538	XS
			43	打尾	×	M	A	—	MA	12,754	XS
			44	打尾	×	G	A	—	GA	11,192	XS

地形	M: 山地および丘陵地 G: 砂礫段丘
流域	S: 庄川 O: 小谷川 N: 梨谷川 A: 境川
集落番号	庄川の東岸に位置する集落
村高 天保10(1839)年	(村平均85石より) XS: 40石以下 S: 40石以上70石未満 M: 70石以上100石未満 L: 100石以上130石未満 LL: 130石以上
明治5年人口	(村平均171人より) XS: 50人未満 S: 50人以上100人未満 M: 100人以上200人未満 L: 200人以上300人未満 LL: 300人以上

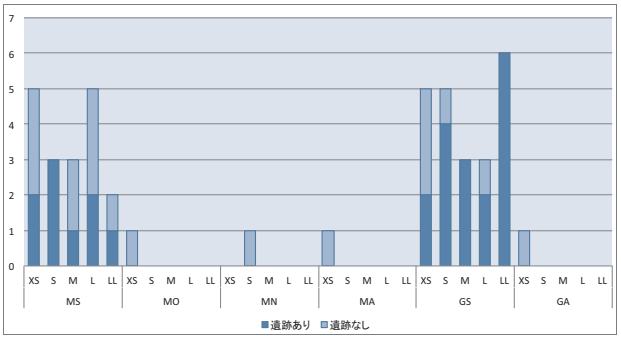


図3: 集落立地ごとにみた規模別大字数

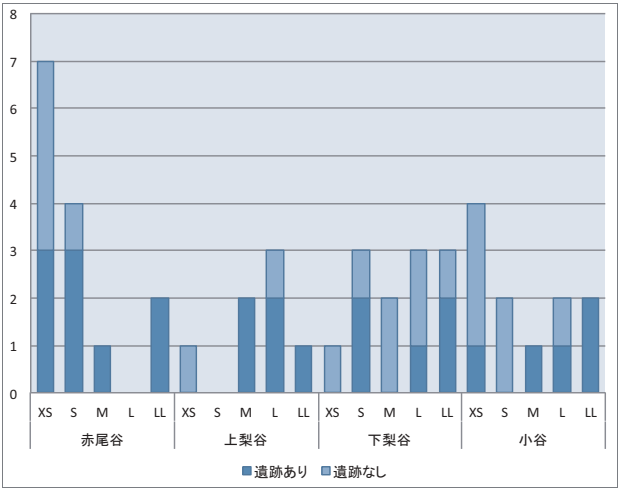


図4: 谷ごとにみた規模別大字数

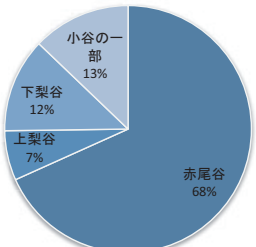


図5: 谷ごとの面積割合⁽¹⁰⁾

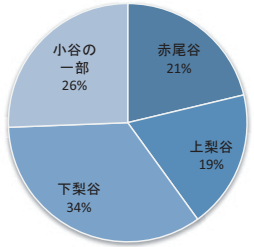


図6: 谷ごとの村高割合

(2) 流域圏と大字

平・上平地域は、庄川・梨谷川・小谷川・湯谷川と境川の流域に形成されており、それらの境界は、旧利賀村や旧城端町との境界にほぼ一致している。次に、平・上平地域を構成する大字の境界をみると、大字もまた、地形に基づく自然環境に呼応して形成されていることが窺える。

多くの上平地域の集落は、庄川沿いの河岸段丘に位置しており、その領域は、菅沼周辺でみられるように、後背の山の尾根や谷で区切られ、比較的明解に形成されている。一方、相倉の位置する地域は、山の斜面地に集落が密集しており、その領域は複雑に入り組んでいる。

庄川の支流流域である梨谷川や境川、小谷川流域には、規模の小さな縄文遺跡の出土のない集落がある。孤立して点在するこれらの集落は、現在ほとんどが廃村している。境

川流域の2集落の廃村は、隣接した白川村の集落の集団離村が引き金となっており、近代以前の生活が周辺集落と連帯して成立していたことを物語っている。

(3) 谷ごとの特徴

江戸時代までの地域区分である谷ごとに比較すると、それぞれに異なる傾向がみられた。

最上流に位置する赤尾谷は、庄川支流の流域圏にある2集落以外、ほぼ全ての集落が庄川の砂礫段丘に位置しており、集落数が一番多く、五箇山の過半以上を占める領域を有する谷である。しかし、村高の小さな集落が際立って多く、生産能力の低い立地環境にあることがわかる。よって、人口も少なく小規模の集落が、庄川沿いに点在した谷である。その中で、規模の大きい西赤尾町は、口留番所や五箇山唯一の寺院がある際立った存在である。一方で、縄文遺跡のある集落が7割を越えており、古くから生活に適した立地環境にあったことが窺える。境川流域圏には、かつて2つの集落があったが、相次ぐ集団離村により、現在は廃村となっている。

上梨谷も赤尾谷同様に、庄川沿いの砂礫段丘に位置する集落が多い。一方で、村高や人口からみると、比較的規模の大きな集落を形成している。この谷は、集落数や領域面積は小さいが、集落自体の規模が比較的大きく、赤尾谷とは違った特徴をもつ。ここにも、縄文遺跡のある集落が多くみられる。また、湯谷川流域圏には集落の立地はないが、修験者登拝の伝説がある人形山や温泉の源泉地として、特別な意味を持っている。

下梨谷は、この地域の約4割の人口を抱える谷であり、村高や人口数からみると、その集落規模も標準的なものを中心に、大規模なものが多く、地域内最大集落である下梨集落が立地する谷である。庄川流域でも標高の高い山腹にまで集落が点在しており、地形としては山地および丘陵地に位置する集落が多いのが特徴としてあげられる。21・22・23番で、密集した集落群（黎明地区）がみられる。上流域では大半の集落が庄川西岸に位置しており、東岸の急峻な地形から、田向から大島の間は集落が存在していない。また、梨谷川流域圏には、唯一梨谷集落があるが、昨今では居住者がいない。他の谷と比較すると、縄文遺跡のある集落が3割程度と少ないことも特徴としてあげられる。

小谷は、地域内で庄川の最下流に位置しており、下梨谷同様に山地および丘陵地に位置する集落が多く、庄川から標高の高い山腹に集落の立地がみられる。村高や人口数からみた集落規模の大小の差が大きく、8、9、10、12番といった隣接し合った規模の大きな集落群（小谷地区）と、それ以外の小さな集落が点在する谷である。

2.3 谷ごとの大字土地利用比率

谷ごとの大字の土地利用の割合を、居住域（ムラ）、田・畑（ノラ）、山林（ヤマ）別に比べると、赤尾谷と下梨谷では、それらの比率が異なる。赤尾谷では、ほとんどがヤマである。畑から収穫する農耕が第一の五箇山にとって、ノラ領域が最も重要であり、大字単位でのノラ面積比率の大

小が、村高規模の差となって現れている。よって、村高の小さな大字はノラ面積が小さく、広大なヤマ領域を隔て、間隔を置いてムラが存在し、結果的に点在する景観となって表出している。

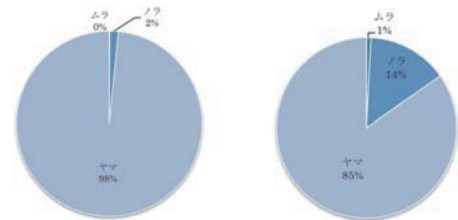


図7: 赤尾谷(左)と下梨谷(右)の「ムラ・ノラ・ヤマ」の割合⁽¹¹⁾

2.4 立地特性からみた地域空間構造

五箇山の集落は、主に庄川流域の砂礫段丘に、上流から下流にかけて、小規模な集落が点在する赤尾谷から、次第に集落規模が大きい上梨谷へ、山地および丘陵地にも様々な規模で集落が比較的密集して立地する下梨谷、小谷へと変化する。また、庄川支流域に位置する集落もあったが、小規模なもので、ほとんどが廃村している。4つの谷における全体面積比率が小さいにもかかわらず、村高が大きい下梨谷は、生産能力の高いノラ面積の比率が大きく、最大の人数を抱えた五箇山の中でも恵まれた環境にある。また、下梨谷や小谷では山腹にまで集落立地がみられ、それらは密集する傾向にある。

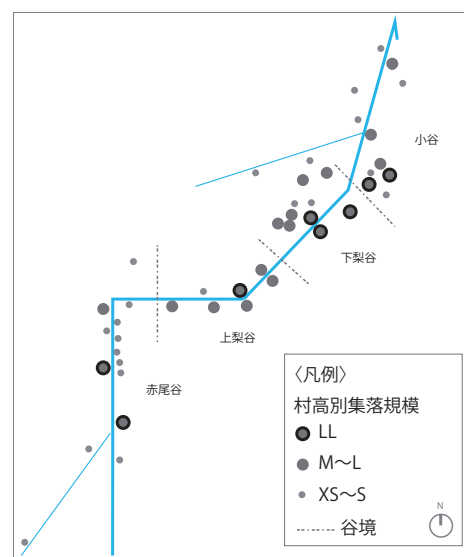


図8: 五箇山模式図

表2: 五箇山の谷ごと大字規模と集落位置

	赤尾谷	上梨谷	下梨谷	小谷
規模	小規模, 大規模	中規模	中～大規模	小～大規模
位置	点在	点在	密集, 点在	密集, 点在

3. 五箇山の大字単位の考察

これまで、大字単位で五箇山を分析してきた。ここで、この大字の単位の根拠を考察する。五箇山には井戸をもつ住居がほとんどなく、谷川や湧水を生活用水としたため、

集落の立地に水環境の影響が大きいことが予測される。また、五箇山で居住域として集落が密集する地区は、下梨谷と小谷の山地および丘陵地でみられた。本研究では、この2つの地区における集落領域の棲み分けを、水環境を糸口として調査し、大字単位の根拠について考察する。

3.1 小谷地区

この地区は、比較的平らな山地および丘陵地の、庄川流域に位置し、入谷、東中江、高草嶺、下出の4つの集落が密集している。地区には、複数の谷川があり、入谷は谷が集まっていることからつけられた名と聞いた。

集落別に谷川の水を分類すると、高草嶺、東中江、下出の山側の組の水源は、高草嶺の山からの湧き水であり、現在の簡易水道の水源にもなっている、豊富な水源である。

高草嶺集落は、この湧き水源から複数の分岐した五郎平谷、まつのき谷、つじのえ谷、あらや谷沿いに住居を構え、その上流域と下流域の別により、3つの組を構成している。上流側に古くからの家が多く、下流側には複数の分家がみられることから、集落は上流側を中心に、次第に下流側に発展したことが窺える。

東中江集落は、堅穴住居址が発掘された東中江遺跡を内包する集落で、集落中心部の国道付近は、もと湿地であった。窪地に位置するため、五郎平谷からの水を二方向に分岐した後、高低差のある箇所は木の樋を使って、各住戸に配水した。高草嶺の下流で一部の住戸がこの水を利用して、おそらく後の時代の交渉による事例であると推測する。こういった住戸は、高草嶺に近接した入谷にもみられ、畑地を宅地化して分家する際、入谷からは水の便が悪かったため、近接の高草嶺から水の権利を得て分家した⁽¹²⁾。

下出集落は、高草嶺の谷川から配水した組と、集落内の湧水から配水した組に大きく二分される。集落内の湧き水は水量も豊富で、沼田とよばれる部分を中心に居住域が形成されている。

以上から、この地区は谷が多く水量が豊富で、その水利環境に沿って集落領域が形成されている。また、分家の際など、水の権利を近隣の集落から得ながらも、その所属は土地に帰属していることから、領域の重要性が窺える。

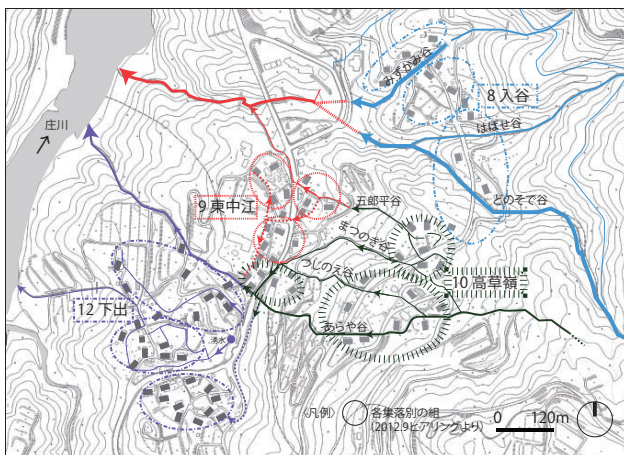


図7: 小谷地区の水利と集落

3.2 榮明地区

明治期には、見座・中畑・相倉で小学校を共有しており、昭和47年に統合されるまで、相倉内に下梨小学校榮明分教場があった。また、中畑と見座では道場を共有した時期もあり、3集落は距離も近く、連帯関係のある地区である。近年は、国道が見座・中畑内を横断しており、道場や神社、住居の移転もみられ、その集落形状は大きく変化している。

この状況下ではあるが、水利と集落の関係について、ヒアリングで大要を得た。集落間を越えて用水を共有している住戸も数戸みられたが、この地区もまた、水利環境に沿って集落領域が形成されている。

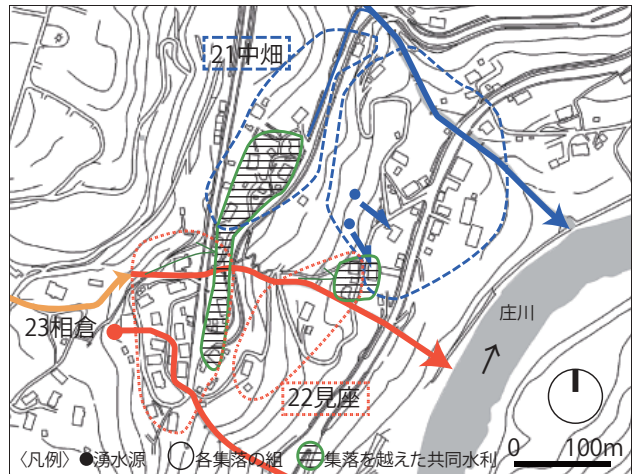


図8: 榮明地区の水利と集落

3.3 五箇山の大字単位の考察

五箇山で集落の密集する2地区をとりあげ、その集落領域の棲み分けを、水利環境から説明した。組は、集落における社会組織の基礎単位であり、同程度の水利環境に基づく地縁関係を基盤として成立している。

4. まとめと考察

本研究では、五箇山の世界遺産と緩衝地帯 22,746.6ha について、景観の形成背景を、地域空間構造の分析を通じて明らかにすることを目的に、大字単位で地域を分解し、集落立地特性や大字の単位の要因に関する考察から、研究を行った。その結果、以下の二点が明らかとなった。

第一に、五箇山の地域空間として、庄川流域圏の砂礫段丘を中心に集落が立地しているが、その谷によって、集落規模が異なっている。上流域の西赤尾谷では、大字の大部分がヤマであり、開墾できるノラが限られたため、小規模な集落が点在している。4つの谷における全体面積比率が小さいにもかかわらず、村高が大きい下梨谷は、生産能力の高いノラ面積の比率が大きく、最大の人数を抱えた五箇山の中でも恵まれた環境にあった。また、下梨谷や小谷では山腹にまで集落立地がみられ、それらは密集する傾向にある。よって、生産能力の高い自然環境が、集落立地とその規模を決定づけており、それらは、近代以前の村高と大字の土地利用比率から読み取れることがわかった。これは、五箇山の文化的景観の深層構造を形成する、根源的な要因

をなしている。

第二に、大字単位の根源的な要因は、水利環境によることがわかった。集落内部の基礎社会単位となる組が、この水利環境による地縁的な関係により成立しており、五箇山は、家→組→集落という社会単位が、大字として集まって構成されている。よって、この水利環境は、社会組織の形成基盤をなす共同体の規定要因であり、同時に地域空間を規定する要因であり、大字は、地域の社会と空間の一致をなす重要な単位である。地域空間も、家→組→集落→大字の単位で空間類型が抽出できるが、今後の課題としたい。

一方で、空間や景観の背景には、「計画的意図と見なすことのできる指向」の読み取りが可能²²⁾であることが指摘されている。本研究は、農山村地域を、大字という一つの生活領域の単位により分析することから、「自然と人間との共同作品」の背景にある、人間社会の「意図」を明らかにできたとも解釈できる。同時に、大字単位から見た、地域空間構造分析の有効性を示すことができた。社会経済面からの地域構造分析との融合は、今後の課題としたい。

〈謝辞〉本研究の執筆にあたり、五箇山の皆様、南砺市教育委員会と平・上平行政センターの方々には、多大な協力を頂きました。心より感謝申し上げます。

【注釈】

- (1) 本稿における「五箇山」は、南砺市の平地域(旧平村)・上平地域(旧上平村)を指す。
- (2) 相倉・菅沼集落の緩衝地帯Ⅰ種(3、863.6ha)と相倉集落の緩衝地帯Ⅱ種(9、406ha)、および菅沼集落の緩衝地帯Ⅱ種(9、477ha)を合計した。
- (3) 「五箇山」は、旧利賀村を含む、旧平村・旧上平村の3か村をいうが、本稿では注釈(1)と定義し、本来の3か村を「五ヶ山」と使い分ける。
- (4) 水津一朗「村落制度」、木内信蔵・藤岡謙二郎・矢嶋仁吉編「集落地理講座 第1巻総論」、朝倉書店、1957年、p.320、第106図より、五箇山は藩政村と行政村境が一致する「標準型」である。
- (5) 「地形分類図 下梨・白川村」、国土調査昭和62年6月23日指定(国土庁告示第1号)を参照した。
- (6) 国土交通省土地・水資源局調査・編集の「1/50,000主要水系調査利水現況 図数値データ(小矢部川・庄川水系(2002年度))」から、5万分の1地形図名:下梨、白木峰、飛騨古川、白川村を参照し、流域圏を抽出した。
- (7) 平村史編纂委員会(1983)、「越中五箇山平村史 下巻」、pp.872-874を参照
- (8) 藤田培「明治最初の戸口社寺牛馬頭数並びに地目反別地価等礪波郡大字七百町村別調」、藤田義農編(1972)『明治初年の礪波』、礪波図書館協会、pp.71-79を参照した。
- (9) 注釈(6)のデータと、ゼンリンZ14「行政圏」の表示データを重ねて、筆者が作成した。
- (10) 注釈(8)を参照した。しかし、上梨谷の猪谷集落の山林面積が漏れているため、正確な数値ではないが、数%程度の誤差を見込み、大要を把握する目的で使用した。
- (11) 注釈(8)を参照した。資料には、宅地、田、畑、林、山林、原野、池に分けた反別の面積が大字単位で記載されている。福田アジオ(1983)「日本村落の民俗的構造」による柳田國男の領域モデルを使い、ムラを宅地、ノラを田・畑、ヤマを林、山林、原野にあてはめて算出した。なお、池は渡原のみ記載されていたが、微小であったため除いた。

- (12) 入谷集落山本氏ヒアリング(2012.9.7)より、ご自身の話。

【参考文献】

- 1) UNESCO World Heritage Center(2008)、「The operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention」、p.85
- 2) P.J.Fowler(2003)、「World heritage Cultural Landscapes 1992-2002」、World Heritage papers (6)、p.107
- 3) 合掌造り集落世界遺産記念事業実行委員会(1996)、「世界遺産 白川郷・五箇山の合掌造り集落」、pp.42、57-58、附属資料4a・4c・4d
- 4) 奈良文化財研究所(2009)、「文化的景観研究集会(第1回)報告書」、奈良文化財研究所、p.8
- 5) 本中真(1999)、「文化と自然のはざまにあるもの 世界遺産条約と文化的景観」、奈良文化財研究所学報、58、p.304
- 6) 麻生美希・増原実樹・佐藤睦美・西山徳明(2009)、「農村集落における空間構成の変遷と景観保全の課題—岐阜県大野郡白川村荻町を対象として」、日本建築学会計画系論文集、74(646)、pp.2637-2645
- 7) マテオ・ダリオ・パオルッチ・宮脇勝(2005)、「群馬県山村集落六合村赤岩地区における文化的景観に関する研究 歴史的な絵図、地籍図、土地台帳を用いた農地のランドスケープの歴史の変遷分析」、都市計画論文集、40(3)、pp.805-811
- 8) 豊島久乃・齋藤英俊(2009)、「水環境への適応とその持続的活用形態からみた山村集落の文化的景観評価」、日本建築学会計画系論文集、74(642)、pp.1905-1910
- 9) 天満類子・菊池成朋(2012)、「限上川流域の棚田景観と水利システム 新川・田竈地区の山村景観保全に関する研究 その1」、日本建築学会計画系論文集、77(674)、pp.805-811
- 10) 宋 曉晶、池田 孝之(2010)、「琉球遺産群」のバッファゾーン及びその周辺地域における景観形成と保全について—首里城跡、中城城跡、斎場御嶽を事例として、日本建築学会計画系論文集、75(652)、pp.1463-1470
- 11) 平田 一俊、神吉 紀世子(2002)、「熊野古道中辺路周辺における景観変化の研究 中辺路町・本宮町域の世界遺産バッファゾーンにおける景観管理に関する研究」、日本建築学会学術講演梗概集(北陸)、pp.715-716
- 12) 社団法人日本建築学会編(1989)、「図説 集落」、都市文化社
- 13) 今里悟之(2006)、「農山漁村の〈空間分類〉—空間の秩序を読む」、京都大学学術出版会
- 14) 社団法人日本建築学会編(1989)、前掲載、p.9
- 15) 齊木崇人(1986)、「集落空間の構成原理と地形立地」、農村計画学会誌、4(4)、pp.19-32
- 16) 飯田晶子・野口翠・大澤啓志・石川幹子(2010)、「流域圏を基盤とする集落の持続的土地利用に関する研究 ミクロネシア島嶼・パラオ共和国・パペルダオブ島を対象として」、都市計画論文集、45(1)、pp.45-50
- 17) 平村史編纂委員会(1985)、「越中五箇山平村史 上巻」、pp.514-515
- 18) 「越中五箇山図」文化11(1814)年、富山県立図書館所蔵、<http://www.lib.pref.toyama.jp/gallery/collection/listsrch.aspx> (2012.11入手)
- 19) 平村史編纂委員会(1985)、前掲載、p.375
- 20) 平村史編纂委員会(1985)、前掲載、p.93
- 21) 米沢康(1962)、「五箇山研究ノート」、飛騨文化研究会、p.9
- 22) 西村幸夫(2004)、「都市保全計画」、東京大学出版会、p.216